

## 万太郎と丘堤防 ―天草移民の築いた川堤

本巢万太郎と養田代四郎の娘モミとの結婚話が出たとき、代四郎はモミを万太郎にやることに乗り気ではなかった。万太郎は天草移民団の中で一番開墾面積の多かった青年だが、何とも風采（ふうさい）の上がらぬ身粧（なり）をして、何を食って生きているのか判らぬような有様だったからである。入植してすでに五年、暮らしの目鼻もついて、おおかたの者はそれなりの生活を送っていたが、万太郎のみすぼらしさは来た頃と少しも変わっていなかった。

“こんな奴に娘はやれぬ”というのが、代四郎の偽らざる心境だったが、娘に問うと、どうも憎からず想っている風である。“これでは仕方がないか”と決心してモミを万太郎にやることにした。

さて婚礼の日、ささやかな祝宴も終わり客も去った深夜、万太郎はモミに「ぜひ見せておきたいものがある」という。寝間の畳をあげ床板をはねると、藁縄（わらなわ）で縛ったカマスが出てきた。口を開けると、見たこともないほどの紙幣やら硬貨がごちゃごちゃに投げ込まれていた。

「おマエには一生生活の心配はさせん」

万太郎は真顔でモミにそう言ったのだという。これらの金は入植時、国から支給された農具仕度料や毎日の副食費、開墾料などを営々として貯めたものである。

万太郎の孫娘西村アイは、祖母モミから聞いたとして次のような話を覚えている。

おそらく国との開墾契約の切れる明治十四年前後の話だと思われるが、万太郎はひとりで天草へ帰ったのだという。一ヵ月たち二ヵ月たっても、万太郎からは何の連絡も無かった。開墾契約は十年である。これまでに貯めた金があれば、故郷の田畑が手に入る筈だった。とすれば、辛い開墾の仕事や、冬の寒さや、熊、狼に脅かされる生活ともおさらばできるのである。

“ひょっとすると夫は帰って来ないかも知れない”そう思い至ると、モミは今度は自分が万太郎を追って天草に帰るか、それとも杵臼に残って再婚するか、そのどちらかを選ばねばならなくなる。決断を迫るような話が、ときどき父代四郎のほうから伝わってくる。思い悩んでいるうちに、ひょっこり万太郎が帰って来た。出発してから半年もたっていた。しかしその表情は思いなしに明るい。

数日して万太郎は浦河へ下った。帰りの荷物のなかに、千羽こき（稲から粉を取る道具）など沢山の農具やら織機、食器、穀類や野菜の種があった。これが半年かけて万太郎が出した結論だったのである。このとき万太郎は、おそらく天草に残っていたいくばくかの資産の処分も行ってきたに違いない。

それからの万太郎の働きぶりはめざましかった。開墾を進めるのにプラオ、ハローといった舶来の農具を導入する一方で、馬を積極的に農耕に取り入れて、のちの本巢牧場の礎となってゆく。開墾した畑には大小豆の作付けを増やし、さらにはオロマップ川の沢水を利用した水稻の栽培さえ試みるようになった。また一方で、収穫した野菜を広く幌泉（現えりも町）、様似、浦河などの市街で売ることを開始する。キュウリ、ナス、カボチャ、ジャガイモ、トウモロコシ、少しあとにはキャベツ、ハクサイなどの葉物もふくめ、野菜ならなんでも売れた。こうした試みが、のちに村独自で浦河、様似に「杵臼蔬菜市場」を開設することにつながってゆく。

この頃のエピソード。杵臼の人は行商に出るとき、誰もが二頭の馬で行く。一頭の背に野菜籠を積

み、一頭には人間が乗る。万太郎は二頭ともその背に野菜籠を積んで、自分は歩いて幌泉まで出かける男だったという。こうして得た現金収入の使途やら隠し場所のことでは別な話を書けるほどだが、それは他日に譲る。しかし経済基盤の強化はのちの杵臼村の発展に有効に役立てられてゆくことになる。

こうして杵臼農民の生活基盤が確立してきた明治二十年代、入植以来苦しめられつづけてきた幌別川の洪水を治めるべく、杵臼農民は立ち上がることになる。直接のきっかけは明治二十三年の洪水で、この年は年間七回の幌別川の氾濫のため、収穫が無くなるばかりか、血と汗の結晶である開墾の土がことごとく流失してしまった。さすがにこのときばかりは一村をあげて転地が考えられ、十勝や旭川方面に視察団を出して転地先を探した。しかし杵臼に勝る土地はなく、ここを楽土とするためには幌別川を抑えこむより手段がない。こう決意した当時惣代だった万太郎は、吉田松市らと相談の上、オロマップ川の下流、現在の本巢孝三宅付近から中杵臼の藪田俊明宅の下流まで、総延長約二里におよぶ築堤計画を村議にかけた。万太郎四十六歳、脂の乗りきった時期だった。

村会はこの提案を受け入れ、翌二十九年から三十二年までの足掛け四年を費してこれを完成させた。これがいわゆる「丘堤防」である。高さは約五尺、巾は上端で約一間、現在も辛うじてその一部が残っている。老若男女を問わず、村民総出の公役（くえき）（公のための労働奉仕）で、シャベルとモッコだけの遅々たる工事だった。「杵臼百年想」によれば、延べ一万人の動員を要したとある。

位置は現在の幌別川新堤からみれば、二〇〇メートルほど杵臼寄りの所で、オロマップ線と呼ばれる道路が当時の川床にあたり、その東側にかつての堤防の跡が認められる。その時分の杵臼の中心地だった杵臼神社周辺は堤防の下端に当たり、上端がそこから二里も上流だったことは、水流が暴れ出すずっと手前で調節しようとした点に大きな着眼点があった。こうして序々に水の力を抜いて、流れを西に向けようとしたのである。万太郎に築堤の技術があったかどうか不明だが、天草移民団の出身地の地形を見れば、急流に翻弄された農民の姿は想像できる。恐らくそうした経験を持った農民が杵臼にはたくさんいたのであろう。

こうして杵臼の農地が守られただけでなく、代々の惣代の手で補修が加えられ、大正十二年にはこの堤防に沿って灌漑溝（かんがいこう）が掘られ、杵臼は日高でも有数の穀倉地帯として名を馳せるが、このときの土功組合の委員長を、万太郎の長男長平が務める。丘堤防を築いた万太郎といい、灌漑溝を掘った長平といい、水に絡んだ不思議な因縁を感じさせる。

[文責 高田]

#### 【話者】

吉田 文夫	浦河町杵臼	明治三十九年生まれ
本巢 弘	様似町西様似	明治四十三年生まれ
西村 アイ	浦河町堺町東	明治四十五年生まれ

#### 【参考】

天草海外発展史（上）	北野典夫著	昭和六十年	葦書房
文芸うらかわ第二号	「杵臼百年想」	松田 薫著	昭和五十八年
文芸うらかわ編集委員会			
杵臼開拓百年記念誌	昭和四十四年	同編集委員会	